

## V 教育相談課の研究

### [ 研究主題 ]

#### 児童生徒の豊かな人間関係づくりに関する研究 －SNSの利用による友人関係への影響に着目して－

#### 1 児童生徒のSNS利用の現状と課題

幼い時からインターネットや携帯電話等のICTメディアに囲まれて育ったデジタルネイティブ世代と言われる現在の児童生徒は、知りたい情報をすぐに検索・収集したり、遠距離でも様々なやり取りを効率的に行ったりしている。また、スマートフォンの普及に伴いLINEなどの無料通話アプリ等のソーシャル・ネットワーキング・サービス(以下「SNS」という。)を利用する児童生徒が増加しており、インターネットでのつながりは日常的な営みとなっている。

その一方では、長時間の利用による生活習慣の乱れや心身の不調のほか、匿名による誹謗中傷など、いわゆる「ネットいじめ」の問題が生じている。特にSNSでは、顔が見えない相手と文字でやり取りをするために、伝えたいことの真意が伝わりにくく、誤解が生じたり、感情がもつれてしまったりした結果、SNSを通しての人間関係に悩む児童生徒も少なくないことが予想される。

#### 2 本研究のねらい

SNSを利用する児童生徒が増加している中、児童生徒の友人関係における実態を「学校楽しいーと」等の調査から多面的に分析・考察し、SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の組織的・計画的な指導・支援の在り方について提案する。

#### 3 実態調査の概要

##### (1) 教師対象調査(平成27年5～12月実施)

教師対象の調査は、生徒指導力向上プログラムや移動講座、校内研修等の出席者に回答を依頼した。質問紙はマークシート式で作成した。

##### (2) 児童生徒対象調査(平成27年6～7月実施)

小学校は12学級以上、中学校は6学級以上を基準に、各教育事務所ごとに1校ずつ、鹿児島市教育委員会管轄から2校を抽出し、小学校は6年生、中学校は2年生を対象に実施した。高等学校は、鹿児島市内から2校、それ以外から1校を当課で抽出し、普通科高校3校、専門高校4校の1・2年生を対象に実施した。質問紙は教師対象と同様、マークシート式で作成し、回答の集約は当課で行った。

#### 4 教師対象の調査結果と分析

##### (1) 回答者数

回答者は小学校221人、中学校162人、高等学校160人、特別支援学校20人の計563人であった。

##### (2) 教師の捉えている児童生徒

教師が児童生徒の姿をどのように捉えているかを「学校生活」、「友達関係」、「SNS利用」の三つの観点から調査した。

<b>■ 児童生徒の学校生活に関する内容</b> ・ 感情をコントロールできない児童生徒が増えていると思いますか。	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
	11.9%	62.4%	24.6%	1.1%
・ 自分の思いや考えを伝えることを苦手にし自己表現力の乏しい児童生徒が増えていると思いますか。	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
	23.2%	66.7%	9.4%	0.7%
<b>■ 児童生徒の友達関係に関する内容</b> ・ 新たな友達との関係づくりを苦手にしていく児童生徒が増えていると思いますか。	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
	6.3%	54.2%	38.4%	1.1%
・ 良好な友達関係であっても本音を隠す児童生徒が増えていると思いますか。	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
	10.1%	63.4%	25.4%	1.1%
<b>■ SNSに関する内容</b> ・ SNSの利用が原因で友達関係に悩むようになった児童生徒が増えていると思いますか。	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
	22.6%	43.3%	22.7%	11.4%
・ SNSの利用が原因で精神的に不安定になった児童生徒が増えていると思いますか。	とても思う	思う	あまり思わない	思わない
	10.3%	41.8%	35.4%	12.5%

### (3) 関係性が豊かになる取組の状況

児童生徒の友達関係づくりをねらいとする体験活動や年間計画の取組の状況について調査した。

<b>■ 体験活動の取組と年間計画に関する内容</b> ・ 児童生徒が友達関係づくりをしやすいように、本音を表し合い、それを互いに認め合う体験活動を実施していますか。	積極的に実施	ある程度、実施	あまり実施していない	実施していない
	9.0%	38.6%	43.1%	9.3%
・ 児童生徒の友達関係づくりをねらいとする年間計画を立てていますか。	学校で年間計画を立てている		41.1%	
	学年で年間計画を立てている		5.5%	
	自分なりに年間計画を立てている		11.3%	
	年間計画はない		42.1%	

### (4) まとめ

回答した教師の多くは児童生徒の変化を感じており、児童生徒に対して人間関係づくりの指導・支援の重要性を理解しているものの、その取組については積極的な実践ができないでいる状態があり、「豊かな人間関係づくり」のモデルプランの必要性が明確になった。

## 5 児童生徒に関する実態調査の結果と分析

### (1) 回答者数

児童生徒の有効回答者は2,307人であった。

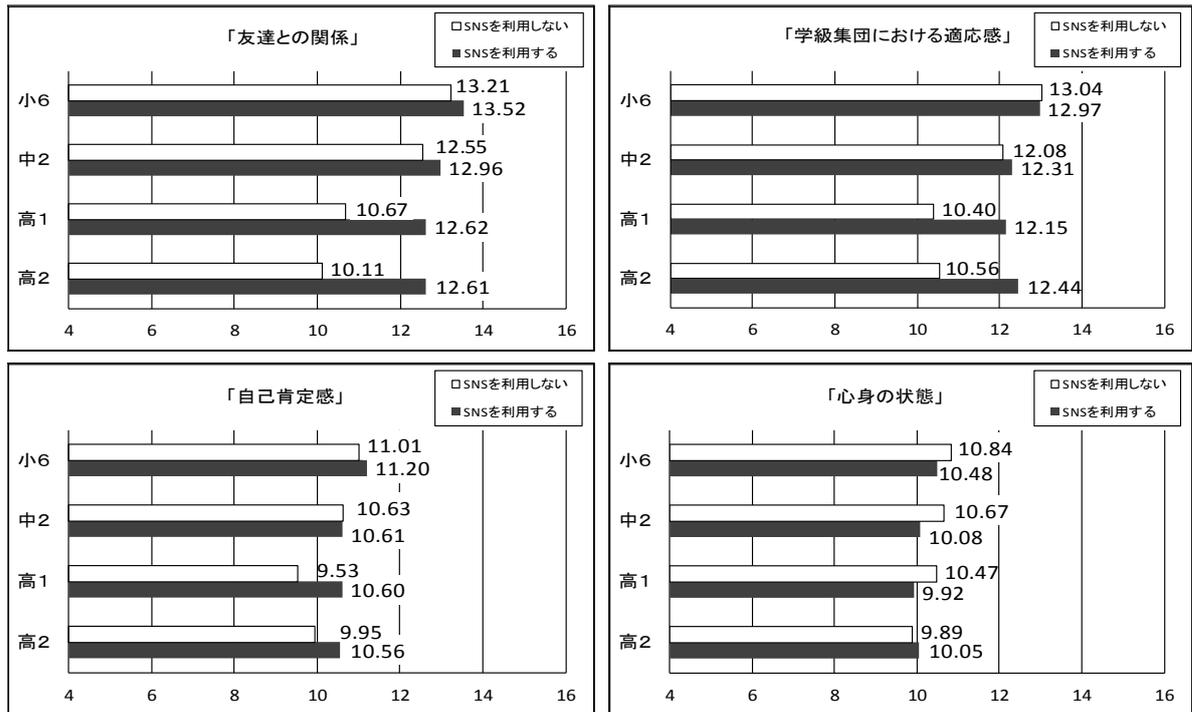
校種・学年	小学6年生	中学2年生	高校1年生	高校2年生
SNSを利用する	333 ( 47.7% )	412 ( 62.9% )	460 ( 95.8% )	459 ( 96.8% )
SNSを利用しない	365 ( 52.3% )	243 ( 37.1% )	20 ( 4.2% )	15 ( 3.2% )
合計	698	655	480	474

単位：人

### (2) SNSを利用しない児童生徒の実態

学年ごとに「SNSを利用する児童生徒」と「SNSを利用しない児童生徒」にグループ分けし、学校適応感を調べる「学校楽しいーと」の友人関係に関わる「友達との関係」、「自己肯定感」、「心身の状態」、「学級集団における適応感」の4観点と、休み時間や昼休みに関する回答を数値化して統計処理（t検定）で比較分析した。

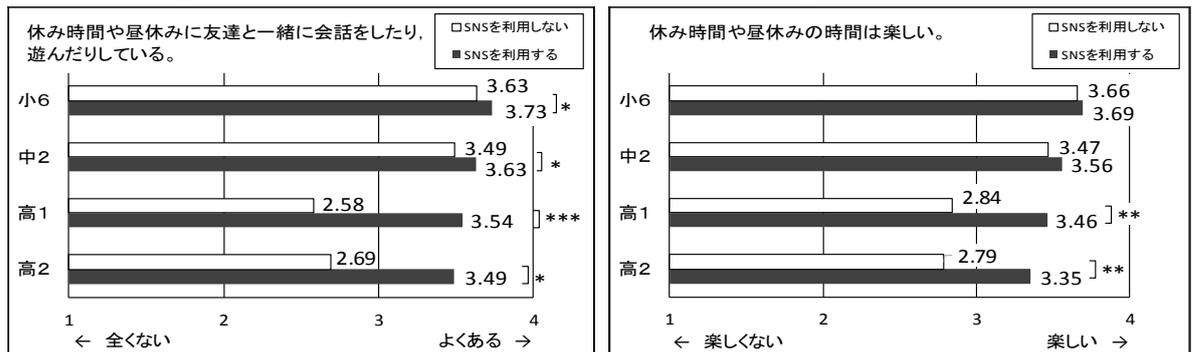
ア 「学校楽しいと」の4観点の比較から明らかになった実態



「学校楽しいと」4観点からの分析

- 友達との関係  
SNSを利用しない中学2年生，高校1・2年生は，利用する生徒よりも明らかに平均値が低い。
- 学級集団における適応感  
SNSを利用しない高校1・2年生は，利用する生徒よりも明らかに平均値が低い。
- 自己肯定感  
SNSを利用しない高校1年生は，利用する生徒よりも明らかに平均値が低い。
- 心身の状態  
SNSを利用しない中学2年生は，利用する生徒よりも明らかに平均値が高い。

イ 休み時間や昼休みに関する質問の回答から明らかになった実態



休み時間や昼休みに関する回答の分析

- 過ごし方  
SNSを利用しない児童生徒は，SNSを利用する児童生徒よりも全ての学年で「友達と一緒に会話をしたり，遊んだりしている」と回答する割合が低い。
- 楽しさ  
SNSを利用しない高校1・2年生は，SNSを利用する児童生徒よりも「楽しい」と回答する割合が低い。

各グラフの\*は5%水準，\*\*は1%水準，\*\*\*は0.1%水準で有意な差があることを示す。

ウ SNSを利用しない児童生徒の実態と「豊かな人間関係づくり」の指導・支援

○ 実態

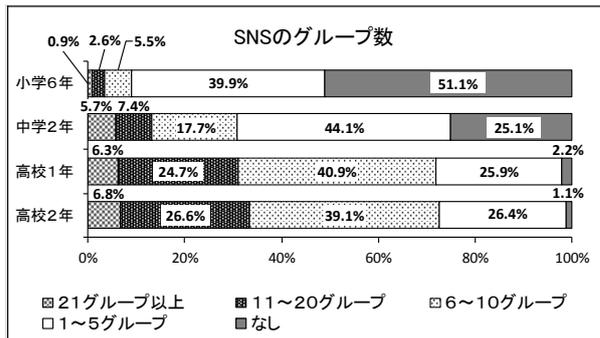
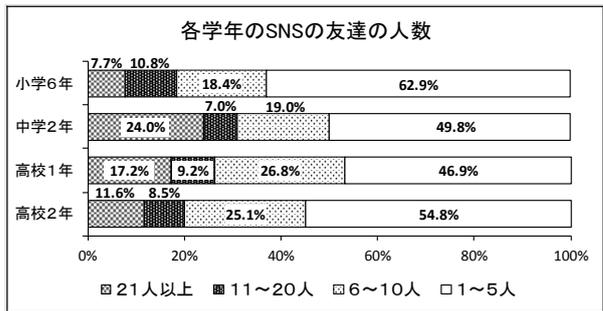
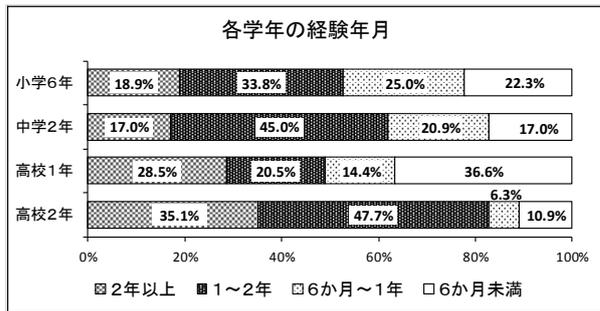
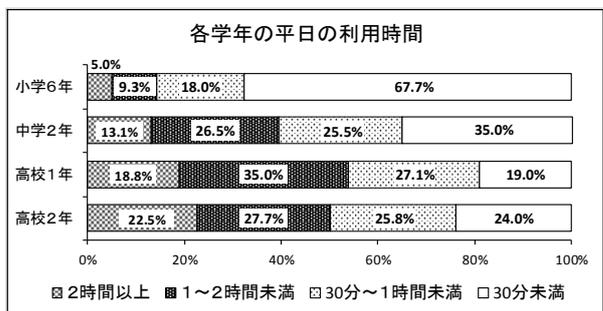
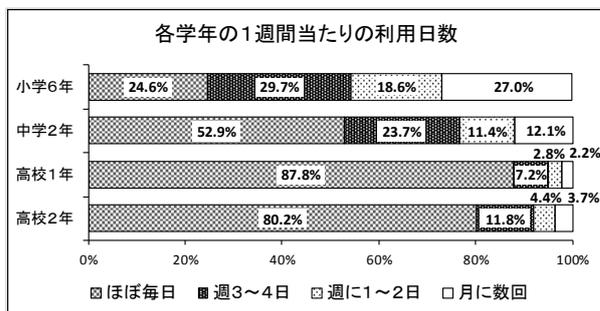
SNSを利用しない児童生徒は、SNSを利用する児童生徒より、友達との会話や活動に楽しさを感じなくなったり、クラスの所属感が低くなったりして、孤独感や疎外感を抱くようになりやすい。

○ 指導・支援

SNSを利用しない児童生徒は、学級集団に対して疎外感もち人間関係が希薄になりやすいことから、誰とでも分け隔てなく一緒に活動できる協調的行動力や、SNSを利用する友達とも一緒に活動することができる適応的行動力を高める指導・支援することが特に必要である。

(3) SNSを利用する児童生徒の実態分析

ア SNSを利用する児童生徒の実態



イ SNSを利用する児童生徒の意識

(ア) SNS観点の整理

実態調査では、SNSの利用に関する意識について16項目の質問を設定して実施した。この児童生徒の回答を統計処理（因子分析）し、五つのSNS観点到に整理した。

SNS観点

□ 「SNSをめぐるトラブル」への備え

SNSのやり取りで相手との関係性が悪化しないように相手の立場を気遣ってトラブルを起こさないように注意する対処

□ 「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処

SNSでのトラブルが発生した際、直接気持ちを伝えたり、親や教師に相談したりしようとする対処

□ 「SNS利用のやり取り」の親和性

SNSのやり取りをすることで互いの気持ちの理解は深まり、友達との関係はより親密になると考える意識

□ 「即レス」の悩み・負担感

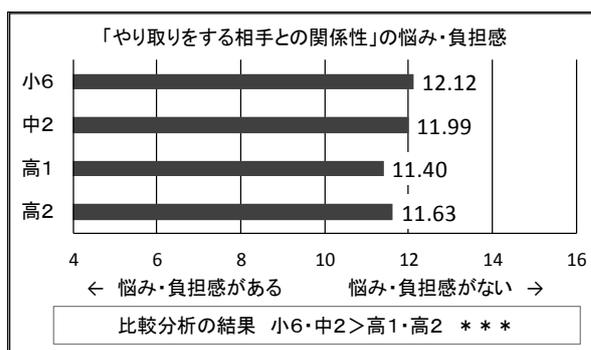
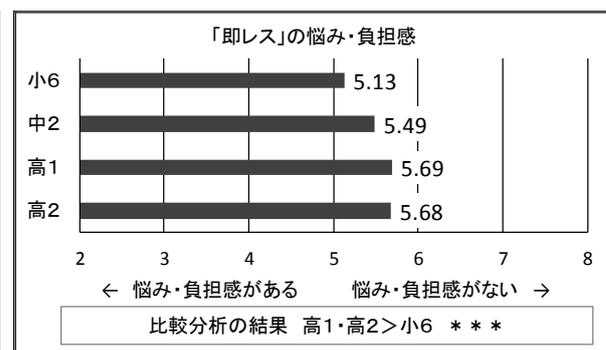
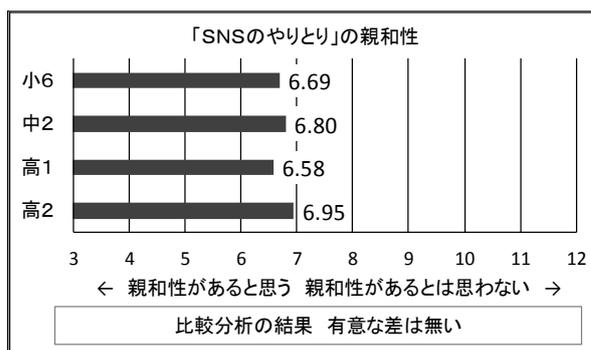
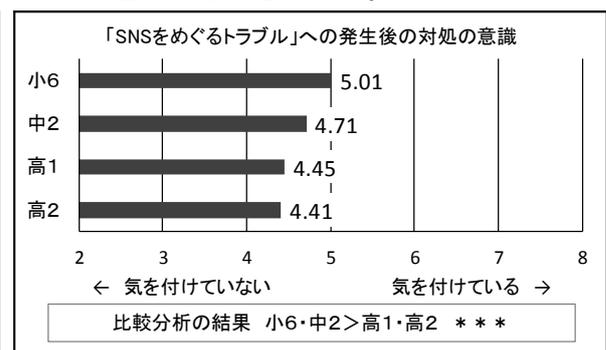
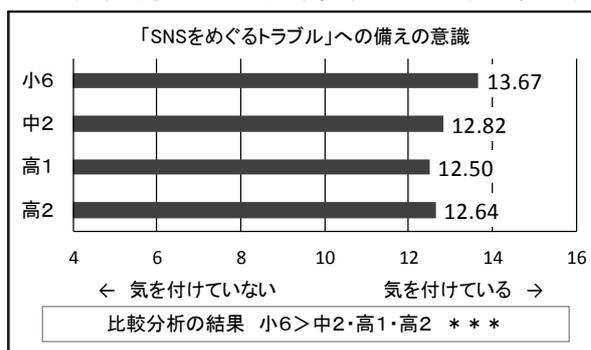
SNSでやり取りをする相手が不快な感情にならないよう、すぐに返信をしなければならないといった強迫的な観念があるため、チェックや返信に苦しみ悩んでいる状態

□ 「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感

SNSでやり取りをする相手に悪く思われたくない気持ちから自分の考えや気持ちを伝えられない、相手の気持ちや考えを確認できないために苦しみ悩んでいる状態

(イ) SNS観点から捉えた学年の傾向と特徴

各学年の傾向と特徴を捉えるために、SNS観点の平均値を統計処理（一元配置分散分析）で学年比較をした結果、以下に示す特徴が見られることが明らかとなった。



\*\*\*は0.1%水準で有意な差があることを示す。

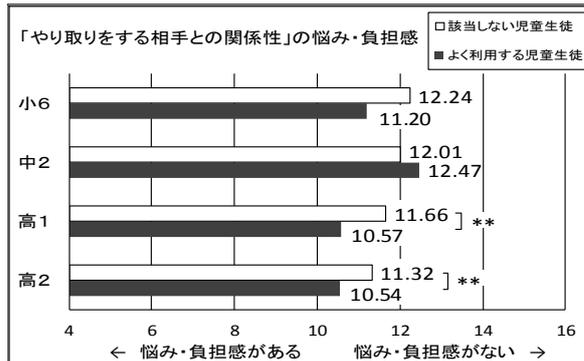
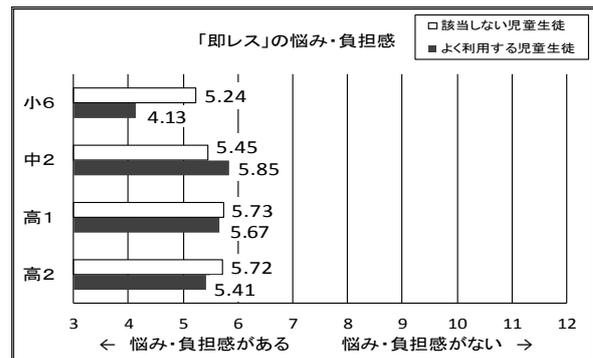
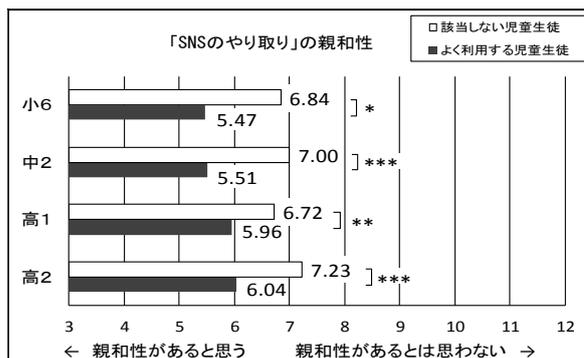
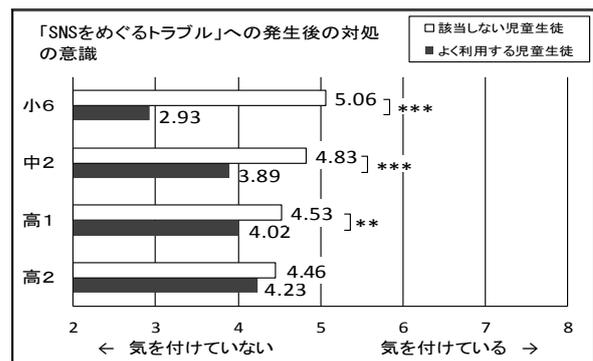
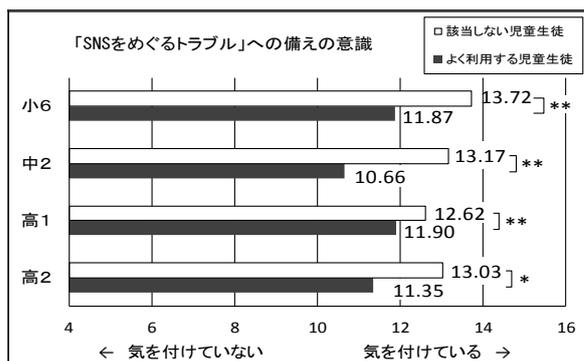


## SNS観点から捉えた学年比較による分析

- 「SNSをめぐるトラブル」への備え
  - ・ 学年が上がるにつれて注意しなくなる傾向がある。
  - ・ 中学2年生，高校1・2年生は小学6年生より「注意していない」と多くが回答。
- 「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処
  - ・ 学年が上がるにつれて注意しなくなる傾向がある。
  - ・ 高校1・2年生は，小学6年生，中学2年生より「注意していない」と多くが回答。
- 「SNS利用のやり取り」の親和性
  - ・ 学年間に差はなく，全学年において「親和性がある」と多くが回答。
- 「即レス」の悩み・負担感
  - ・ 小学6年生は，高校1・2年生より「悩み・負担感がある」と多くが回答。
- 「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感
  - ・ 高校1・2年生は，小学6年生，中学2年生より「悩み・負担感がある」と多くが回答。

### (ウ) SNS観点から捉えた「SNSをよく利用している」児童生徒の傾向と特徴

「SNSをよく利用している」児童生徒（「毎日，2時間以上」利用する児童生徒）の傾向と特徴を捉えるために，SNS観点の平均値を統計処理（t検定）で比較分析をした結果，以下に示す特徴が見られることが明らかとなった。



	よく利用する	該当しない
小学6年生	15	278
中学2年生	47	335
高校1年生	82	350
高校2年生	96	345

単位：人



\*は5%水準を示す。

\*\*は1%水準を示す。

\*\*\*は0.1%水準を示す。

## SNS観点から捉えた「SNSをよく利用している」児童生徒の分析

- 「SNSをめぐるトラブル」への備え  
全ての学年において「気を付けていない」と多くが回答。
- 「SNSをめぐるトラブル」への発生後の対処  
高校2年生を除き、「注意していない」と多くが回答。
- 「SNS利用のやり取り」の親和性  
全ての学年において「親和性がある」と多くが回答。
- 「即レス」の悩み・負担感  
「毎日」、「2時間以上」の利用条件に該当しない児童生徒と有意な差は見られない。
- 「やり取りをする相手との関係性」の悩み・負担感  
高校1・2年生において「悩み・負担感がある」と多くが回答。

## ウ SNSを利用する児童生徒の実態と「豊かな人間関係づくり」の指導・支援

### ○ 実態

SNSを利用する児童生徒は、「学校楽しい」とや「昼休み・休み時間」の分析からSNSでやり取りをする相手とは親しい関係を築ける傾向が見られる。しかし、SNSを利用する時間が増えると、相手を気遣ったやり取りをしなくなったり、メッセージの応答や関係性に悩み負担感を抱きやすくなったりする傾向がSNS観点の分析から分かった。

### ○ 指導・支援

SNSを利用する児童生徒は、相手の気持ちを考えずに利用してトラブルを起こしたり、対面で自分の気持ちや思いを伝える表現行動ができずに悩みやすくなったりすることから、自分の考えや気持ちを率直に表現できる行動力や、相手の立場をよく考えて利用できるコミュニケーション力を高める指導・支援が特に必要である。

## 6 「豊かな人間関係づくり」の組織的・計画的な指導・支援の在り方

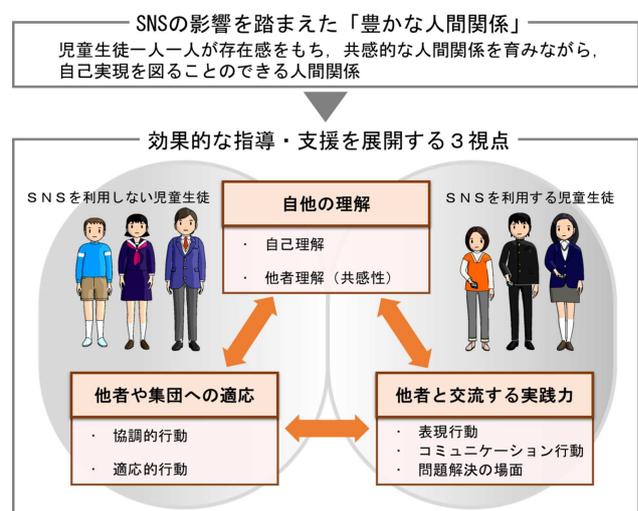
### (1) SNSの影響を踏まえた「豊かな人間関係づくり」の三つの視点

実態調査の結果から、「豊かな人間関係」を「児童生徒一人一人が存在感をもち、共感的な人間関係を育みながら、自己実現を図ることのできる人間関係」と捉え、SNSの利用実態から効果的な指導・支援の視点として以下のように設定した。

- 全ての児童生徒に共通して、人間関係がまだ十分に形成されていない新学期の始めに、他者との関わりの中で自己理解・他者理解を深めるとともに他者を思いやる「自他の理解」を育む視点

- SNSを利用しない児童生徒には、分け隔てなく互いの存在を理解して尊敬し合える「他者や集団への適応」を育む視点

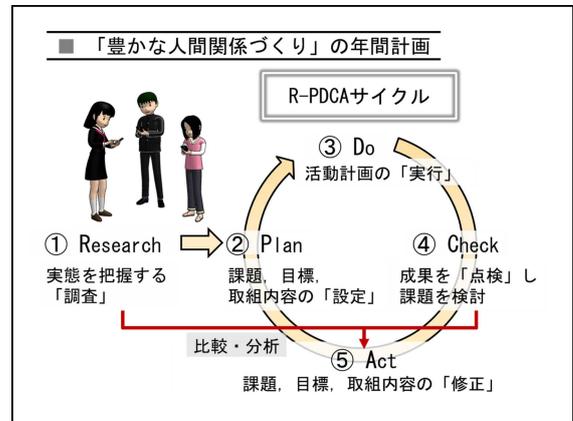
- SNSを利用する児童生徒には、SNS上での不快な感情を抱え込まずに相手に伝えたり相談したりしてより良い関係を図れるようにし、また、SNSで交流するグループ以外の児童生徒とも関わりをもてるようにするなど「他者と交流する実践力」を育む視点



(2) 検証改善サイクル（R-PDCAサイクル）を基準にした年間計画

「豊かな人間関係づくり」の年間計画は、「Research（実態を把握する）→Plan（計画を設定する）→Do（実行する）→Check（点検する）→Act（改善する）」の検証改善サイクル（R-PDCAサイクル）を周期的に行って、改善を図りながら進めていくことが大切である。

- ① Research：「学校楽しいと」や「SNSチェックシート」などの指標を用いて「調査」し、児童生徒の実態を客観的に把握して現状の課題を明らかにする。
- ② Plan：明らかになった課題を基に、目標と取組内容を「設定」する。
- ③ Do：設定したPlanに基づいて「実行」する。
- ④ Check：取組前にResearchした指標の結果と比較してどのように変容したかを「点検」する。
- ⑤ Act：行動計画、目標や方向性を見直し、新たに「修正」した行動計画を立案する。



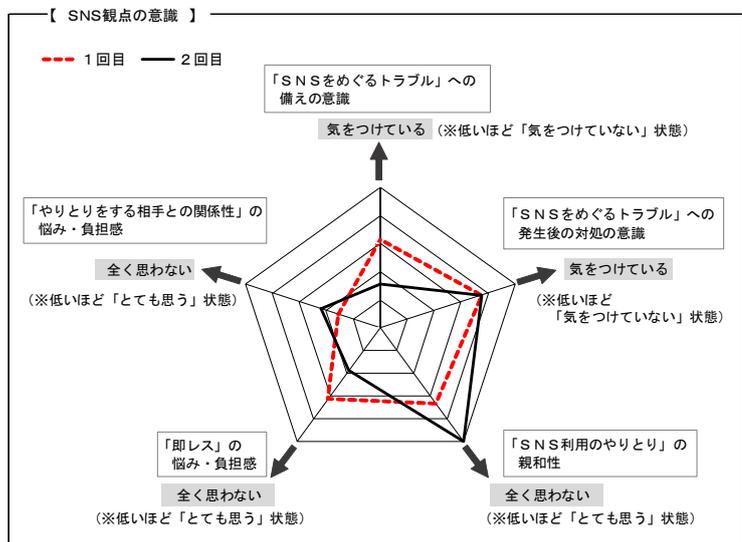
(3) 「SNSチェックシート（仮称）」の開発

現在、実態調査の統計処理による分析結果に基づき、SNSを利用する児童生徒のアセスメントができる「SNSチェックシート」を開発中である。

「SNSチェックシート」は、児童生徒のSNSの利用状況と五つの観点から心理状態を客観的に把握できる質問紙であり、Researchの段階において「学校楽しいと」と併用して実施できる指標になると期待される。



【 SNSの利用実態 】		
	1回目調査	2回目調査
(1) SNSの1週間当たりの利用日数	ほぼ毎日使う	⇒ ほぼ毎日使う
(2) 平日にSNSを利用する時間	1～2時間未満	⇒ 2時間以上
(3) SNSを使い始めてからの経験年月	1～2年	⇒ 2年以上
(4) SNSでメッセージのやり取りをするグループの数	グループチャットはしない	⇒ 21グループ以上
(5) 普段、利用しているSNSのメンバー	学校内のメンバーは半分より少ない	⇒ 学校内のメンバーは半分より多い



7 今後の研究

- 小学生・中学生・高校生の各学年の「SNSチェックシート」のデータをより多く収集・蓄積し、本県の特徴や傾向について更に明らかにすることが必要である。
- 児童生徒の健全な成長と人格のよりよい発達を促す開発的・予防的な生徒指導の視点から、学校適応とSNS利用の影響の関連性については、今後、更なる研究が必要である。